

C /

實
驗
日
本
修
身
書
卷
四
尋
常
小
學
生
徒
用

T1A3

22

W46j

明治六年九月十八日
文部省檢定

三宅 朱吉 校閱
中根 淵 編纂
渡邊 政吉 纂

實
日本修身書卷四
尋常小學
生徒用

東京 金港堂書籍株式會社

圖書 和圖書 遡



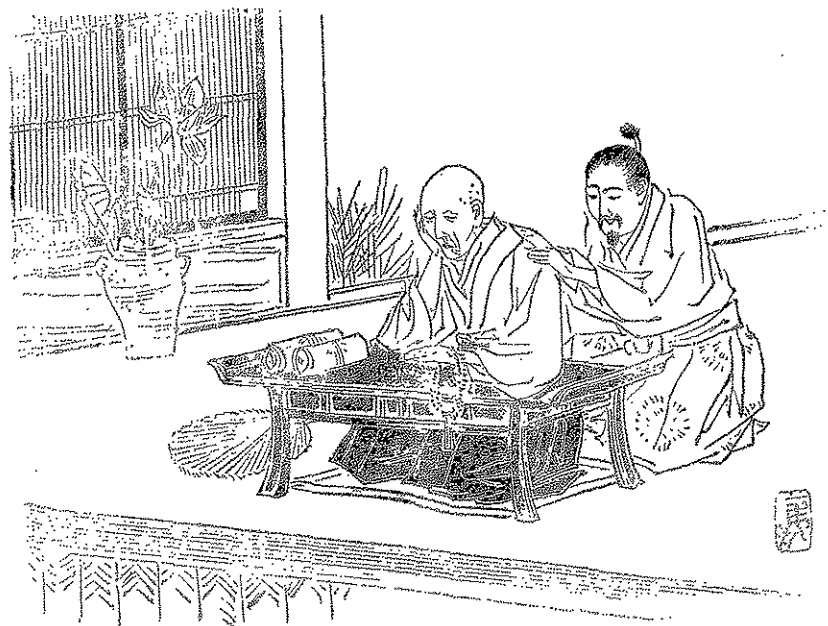
a 1 3 8 0 3 2 9 2 1 0 a

福岡教育大學蔵書

第一課 孝行

人の行ひは、善も悪
も、善は、孝行に過
たるはなく、悪は不孝
より重きはなり。

されば「人の行ひは、孝



より大いなるはなり」とて、むかへも今も、孝
行の人をめで、不孝の人をせめざるはなり。

藤原良繩は、孝行の心深き人なり。父の
つとめさきにて、死したるをききし時は、
悲しみて氣絶し、母の病ひにかかりし時は、
晝夜これたらず介抱したり。

人の行ひは、孝より大いなるはなり。

第二課 孝行

仁徳天皇は、應神天皇第四の御子にて、天性至孝にまゝりたり。其の皇子にて、れはまゝりこる。父帝年老いて、末の御子稚郎子を愛したまへり。或る日皇子と其の御兄とを召して、「汝等子を愛すや、又幼きと年長けたるとは、いづれを愛する

や」と問ひたまへば、皇子は、早くも父帝の御位を弟に譲らんの御心あるをさとり、「幼きを愛す」と答へたまへば、父帝大いに悦び、「汝が言、能く朕が心に合へり」と宣ひて、遂に稚郎子を立てて皇太子と爲したまへり。孝子の老を養ふや、其の心を樂まゝめ、其の志にたがはず。



作兵衛といへる人は、
兄より少い家産を
受け、別に家をかまへ
て、弟と同ぐ住みけ
るが、兄の家をとりつ
て、田畑をうりつくさ

んとするを見て、怒にいさめ、我が家にうつり
すまはせて、三人共に農業をつとめ、其の取り
高を三つに分ち、睦くくらうたりとぞ。

兄は、何事も弟に先ちて、弟をひきまはし、
弟をば憐みいたはり、弟は、何事も兄の
つぎに立ち、兄に従ひてうむくことなく、
兄をあがめうやまひ、大切にすべし。

第四課 兄弟

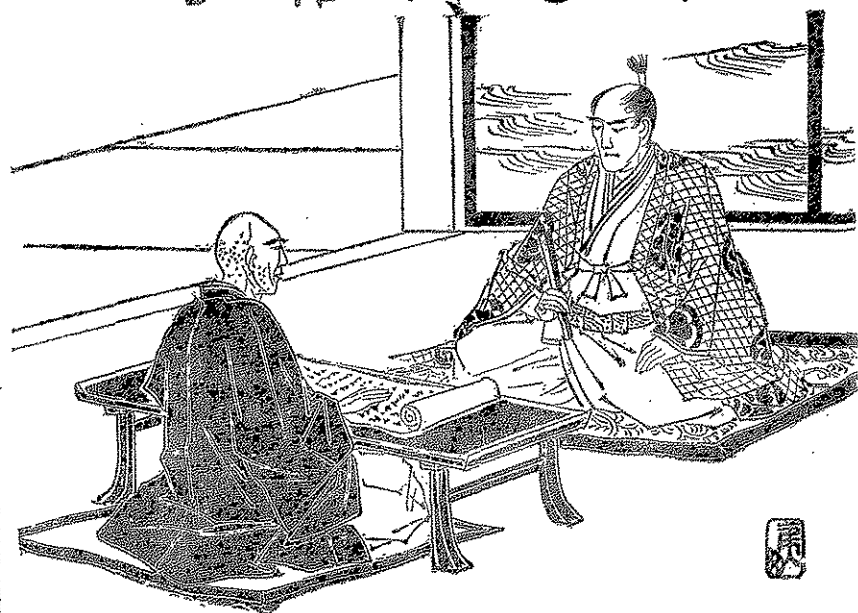
兄弟の親しみを全くせんには、兄は、弟を
憐みいたはり、弟は、兄をあがめうやまひて、
小利を争ふことをまにはしらず。

本多忠勝^{ホンタタカカツ}、病みて死せんとする時、黄金一萬兩を、
次男忠朝^{タクトモ}に分つづきことを遺言^{ユイゴン}せり。忠勝死し
たる後、長男忠政^{タクマサ}之をききて、「父の遺^{ユイ}たまはる

ものは、皆我が物なり」とて、金を渡さざりしに、
忠朝少しも争ひうらみず、「兄上は、家來も多ければ、
其の金を納めれきて、扶助^{フジュ}の料にあてらるべし、
我は、家來も少ければ、金の入用なり」といひたり。
忠政之を聞きて、深くはぢいり、一ひて金を渡し
ければ、いなむに言葉なく、「さらば入用の時まで
あづけねきたし」とて、生涯^{シヤウガイ}受け取らざりき。

第五課 女工

徳川頼宣、那波某に向
ひて、女子のつけ方を
たづねゝに、女子には
學問を修めゝめ、貞信
の道をわきまへゝむる
の外に、大切な事三つ



あり。第一は、自ら髪を結ふことなり。第二は、
裁縫に熟することなり。第三は、料理の仕方を
知ることなり、と答へたり。

凡そ女子にして、髪ゆふことを善くせず、衣服
をたちぬひすることを知らず、食物を料理する
ことを知らざれば、不自由多く、其の上、無益の
費に多くして、家をたもちがたし。

第六課 朋友

徳川^{トクガハ}秀忠^{ヒデタダ}病^{ヤマト}ひにかかり一時、永田^{ナガタ}徳本^{トクホン}のれうぢをうけに、忽ちにいければ、褒美^{ホウビ}を與へんといふに「藥代の外は、ただかず」とて、ことわりたり。なほ「何なりとも、望みあらば、申したつべし」といへば「さらば我が友だちに貧乏きものあり、それを以て、其の友をすくひたい」と答ふ。

秀忠これに感^{カン}ずて、其の言の如くに爲たり。友だちとつきあふには、あひたがひに信實の心をむねとして、たのもしくまどはるべし。友だちの心得^{ココロ}ちがひありて、わるきことあらば、意見をいひ、難儀^{ナニギ}なることをばすくひたすけ、何事も信實に―ていつはりなく、たのもしくするを朋友の信といふなり。

第七課 朋友

朋友は、互に信を守りて、たのもしくすべし。

新井白石は、木下順庵の門人なり。順庵、白石を

加賀侯にすすめんとしけるに、同門人に

岡島石梁とて、加賀の國のものあり、この事を

ききて、白石に向ひ、「余は國許に老母ありて

久しく余がかへるをまてり。若し師のすすめに

て、本國の君に仕へ、老母の心をなぐさむること
を得ば、此の上もなき喜びなり」といひたり。

白石其の心をあはれみ、直ちに順庵につげ、
「小子は、何れの國に仕ふとも、更に知らぶところ
なり。願はくは、小子をねきて、まづ石梁を
御すすめ下された」とこひければ、順庵感ず
入りて、白石のいふ如くになりたり。

第八課 公明

事に當りては、まづ
其のよーあーを明
らめ、義に基きて之
を行ふべし。

昔青砥藤綱といふ人

北條時頼に仕へて裁判

青砥藤綱、訴
状をいふ。



の事を司りし時、一人の武士、時頼の領分のもの
と田を争ひて訴へ出でたり。役人ども時頼を
ねろれ、武士の方を非とけるに、藤綱委しく
取りらば、正しくさばきて、武士の申し立ての
如くに爲たり。武士其の恩に報いんとて、陰に
金を其のやーきへなけいければ、藤綱「禮を受く
べき理なし」とて、直ちにたくりかへさめたり。

第九課 公明

板倉勝重、京都にありて、所司代といふ役をつとめ、こゝろ、宅地の界をあらうひて、訴へいでたるものあり。其のもの、かねて勝重を知り、かば、瓜の初物をれくりて、裁判の事をたのみたり。勝重は、瓜を受けて、ただ「近日のうちに、土地を見分せん」とのみ答へたれば、其のもの、さては己れの

申し立ての如くなるべしと、心の中に悦び居たり。程なく勝重見分にゆき、かかりあひのもの一同を呼びいだりて、其の地界をただし、やがて瓜をれくり、ものに向ひ、「先日は、めづらき瓜をれくられて、かたづけなり。さて此の地は、見分をとげたるに、隣家のものにさうるなければ、早早ひきわたさるべし」とれごろかに申しわたりたり。

第十課 博愛

世に住むこと一日な
れば、一日の善人とな
るべし、一日も善を行
はずして、日をわくる
べからず。

藤七は、洪水の出で一時



舟を出して人をたすけ、又用水の溝をほりて、
村の益をはかりたり。

吾が家の内、又は家の外なる道に、人の往來の
障りとなるものあれば、之を除きて他所へ移し、
喉かわく人には、一杯の水を與へ、疲れたる
ものには、一碗の食を與ふる類、いささかなる
事ながら、人の益となること極りなかるべし。

第十一課 學問

萬づの事、學ばざれば、誠の志ありても、其の道を知らずして、正理を行ひ難し、殊に忠孝の二つに、志はありとも、其の道を知らざれば、忠が不忠になり、孝も不孝になる、故に殊更忠孝の道をよく學び、其の法を知りて行ふべし。

中江藤樹は、十一歳の時、大學を讀みて、天子より庶人に至るまで、一に皆身を修むるを以て本とす、といふに至り、深く感心して、此の書幸に今にのこれり、聖人も學びて至ることを得べきなり、といひ、が、それよりいよいよ書を讀み身を修めて、名高き人となりたり。人學ばざれば、道を知らず。

第十二課 勤勉

筑後の國の農夫某の
妻に、たき女といふも
のあり。夫病ひにかかり、
家貧しくして、藥を求
め、生計を立てがたか
うかば、つけぎをけ



づり、錢を取りて、其の料にあてたり。夫死
たる後は、七里の道を往きかよひて、生魚を賣
り、或は朝早く起きて、山に往き、落ち葉枯れ
枝を拾ひて之を賣り、老母と幼兒とを養ひ、多
年の間、怠ることなく、其の業を勵みうかば
つひにゆたかに世をたくるにいたれり。
かせぐにたひつくびんばふなり。

第十三課 養生

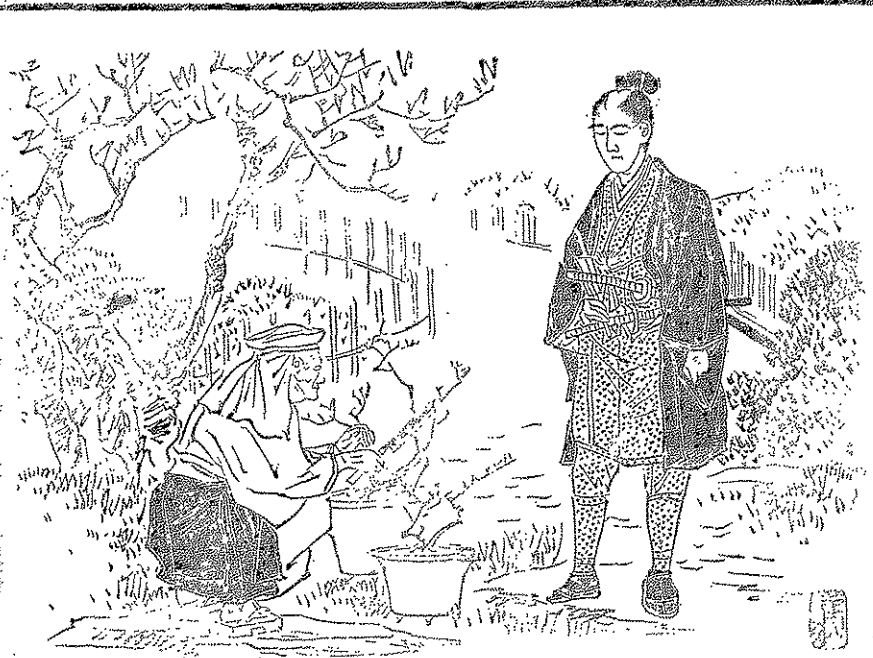
寺澤廣高は、肥前の國唐津の城主なり。常に養生を心がけ、毎日午前四時に起き出でて、二時の間、職を勤め、食事前必ず馬に乗りて馬場を駆け廻り、食事後は、武藝を學びて身體を健にし、用事なければ、午後六時にいねて身體を休め、精神を養ひたり。されば平生は勿

論軍に臨みても、人に後れを取らざりき。

廣高常にいへるやうに夜ふけまで、無用の事を語りあへば、徒らに精神をつからせ、明日の勤めをも妨ぐるものなり。とて、召し使ひの人へも、早く暇を與へ、眠りにつかゝめたりとぞ。

曉には、早く起きんことを要し、夜は、熟眠せんことを要す。

第十四課 後を圖る



或る時徳川家光、老僧
の接ぎ木するをみて、
「慙かなるわざならずや、
といふに、僧みかつりて、
抑御身は何人なれば、
かかる心なき事をいふ

ずや、試に思ひみるべし。今此の木を接ぎたけ
ば、後住の代に至りて、何れも大木となりぬべし。
其の時に至らば、林も茂り、寺の景色もよくな
りなん。我はただ寺のためを思ひてこそ接ぎ
木するなれ、我が身一代のためばかりを思ふに
あらず」と答へければ、家光其の心入れをほめ
て、褒美を與へたり。

第十五課 沈毅

凡う人は、沈毅^{チンキ}とて、心雄^{コウ}雄^{コウ}くくして、ねちつきたるをよとす。臆^{オウ}病^{ビョウ}にして、心ねちつかざれば、事をあやまりやすし。されば、常^{ジョウ}常^{ジョウ}心をたけくもち、心のねちつきを工夫し、事にのぞみて、ねどるきざわぐことなからんやうに心がくべし。

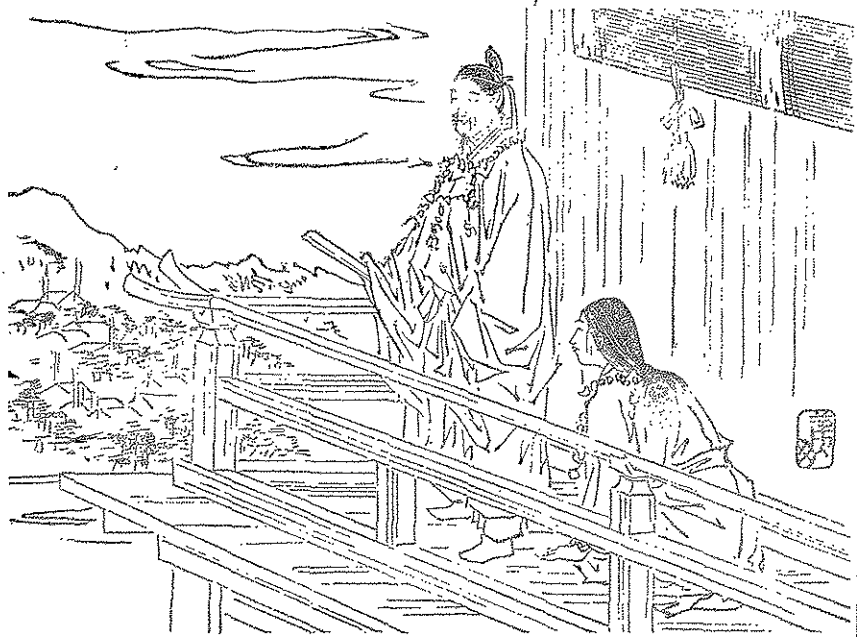
或る時池田輝政^{イケダテラサキ}、岐阜^{ギフ}の城を攻めねど、

其の右筆^{イサヒツ}芳賀^{ハハ}内藏^{ウチザウ}允^{イン}を召して、勝ち軍の
一らせをかかりぬたり。をうふ城の焰硝^{エンセウ}
ぐらに火うつりて、ねちつきとけければ、
人人あわてねどるき一に、内藏允のみは、
手さへふるへもせず、ねちつきて、てがみを
かきぬたりとす。

勇者は、ねちれず。

第十六課 皇恩

世世の天皇は、いづれも
仁恵ふかくまゝ――
が殊にすぐれて、民を
愛したまひ―は、仁徳
天皇にぞありける。
天皇の御世に、凶年^{キヨウネン}り



ちつづき―ことあり。あるとき天皇、民の
かまどより立ちのぼる烟りのまれなるを
御らんどて、其の貧しきを知り、御^{ミコ}の
費^{ツツ}はぶきて、租税^{ソゼイコタエキ}公役^{コウエキ}をゆるしたまへり。
かくて三年をすごしけるほどに、民のかまど
より烟りも盛んに立ちのぼりければ、朕已に
富めり」とて、悦ばせたまひたり。

第十七課 報恩

人は、貴きも賤きも世にある間は、人より恩を受けずといふことなり。も一人より恩を受くることあらば、深く心に留めねきて、久しく忘れず、常に其の人の幸をいのり、恩に報ゆるの道をたもふべし。かりきめにも、人の恩誼をかるんど、其の

心をうこなふべからず。

喜兵衛といへる人は、もとの主人の家火事にあひて、難儀にねちいりし時、其の家に來りて、貯へたきたる金を出し、且田畑を耕して、之を助け、主人の死したる後も、其の子孫を助けて、もとの恩に報いたり。恩に報ゆること、誰もかくころありたけれ。

第十八課 忠孝

むかー平清盛ヘイキヨモリの、ねごり
をきはめーころ、藤原フヂハラ
成親ナリチカといふもの、清盛を
にくみて、之を亡さんと
しけるに、後白河法皇ゴシラカハフワツも
亦之に與みーたまへり。



清盛之をまきまて、大いに怒り、成親をとらへ、且
法皇をもねーこめ奉らんとしけるを、清盛の長子
重盛シゲモリ、父の前に出で、世に皇恩ほど重きはなし、
然るを今其の大恩を忘れて、不忠の事を行はんと
せば、神明シメイいかでか助けたまはんや」と誠マコトを
つくして諫めイサメければ、清盛遂に思ひ止りたり。
孝を以て君に事ふれば、則ち忠なり。

第十九課 忠愛

後一條天皇の御代、女眞の賊來りて、對馬壹岐の二島に寇し、壹岐守某を攻め殺し、進みて筑前の國に攻め入りたり。時に藤原隆家といふ人、太宰權帥として宰府にありけり。此の人、弓箭のわざこゝろ習はざれ、心は雄雄きものなりしかば、直ちに兵を出し、迎へりし

て、賊を退けたり。

賊猶すきをうかがひて、他の處を攻めしかど、隆家諸將に令をつたつ、兵を出し、船を發して之を伐ち退けければ、賊勝ちがたきを知りて、遂に逃れ去りたり。

國をうれつて、家をわすれ、身をこころて、難をすくふは、忠臣の志なり。

第二十課 國法

國に掟なければ、弱きものは、強きものの爲めにねづつけられ、強きものも、常に争ひ合ひて一日も安き日はなかるべし。されば古より掟を

藤作租税を納む。



定めて、是等の争ひをふせぎ、善き人をたすけ、惡き人をこらしむことなり。

藤作といふ人は、常に國の掟を重んじ、租税は、必ず人に先ちて納め、又村の人に向ひて國の掟を重ずべき事、諸役人の命を守るべき事等をさとしけるが、何れも其の誠意に感ず、其の言の如くに爲りたりといふ。

又作... 卷四

明治廿六年六月十日印刷
同 年六月廿七日發行

定價金五錢五厘

著作者

渡邊政吉
本郷區森川町壹番地

發行所

金港堂書籍株式會社
日本橋區本町三丁目十七番地

代表者

社長 原亮三郎
下谷區龍泉寺町四百十番地

賣捌所

金港堂
大阪市東區南本町四丁目
金港堂
宮城縣仙臺市國分町五丁目



